The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ハミルトン博士の訃
Author(s)	森安, 孝夫
Citation	内陸アジア言語の研究. 2003, 18, p. 1-6
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/16514
rights	
Note	

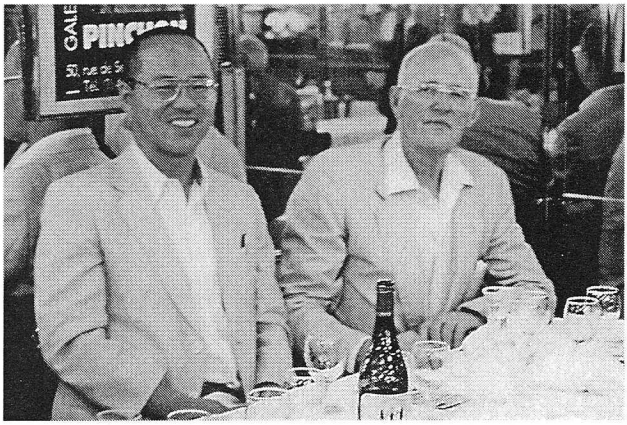
The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ハミルトン博士の訃

森安孝夫



20世紀後半のフランス東洋学，特に中央アジア学とトルコ文献学の分野に大きな足跡を残された元 CNRS（フランス国立科学研究中心）研究指導教授（Directeur de Recherche）ジェームス=ハミルトン James R. Hamilton 博士は，2003年5月29日，パリの救急病院にて逝去された．享年82．元来アメリカ合衆国人である博士は1974年にフランス国籍を取得されたが，生涯独身を通され，またすでに本国にも近親者はおられないため，告別式は本年6月14日，Société Asiatique（フランス=アジア協会）の主宰によりパリ第20区のペール=ラシェーズ（Père Lachaise）墓地にてしめやかに執り行なわれた．欧州出張中で，たまたま葬儀に参列された梅村坦氏からの電子メールによる報告によると，まだ朝の涼しさが若干残る静かな曇りがちの天気の中，バザン先生をはじめ長老をまじえた約五十名の参列者が，代表二人による弔辞の後，一人ずつ花束を捧げたり黙祷したり，思い思いに弔意を表して解散するという，日本では考えられないほど簡素ながら，心のこもったものであったという．

ハミルトン先生は，私が東京大学にて薫陶を受けた恩師である榎一雄・護雅夫両教授と並び，私の1978～80年のパリ留学時代にトルコ文献学に関する手ほどきを受けた恩師の一人である．奇しくも本年5月，私と吉田豊神戸市外国語大学教授とはコレージュ=ド=フランスの招きを受け，それぞれ四回ずつの連続講義を行なうためパリに滞在中であった．そして5月28日，我々の最後の講義に参加されるためコレージュ=ド=フランスに来られた先生は，正面玄関に続く広い前庭の石畳の上に昏倒され，頭部から多量の出血をされて意識不明のまま救急病院に運ばれたが，その後意識を回復されることなく逝かれたのである．私は当日の夕方病院にお見舞いに参上したが，昏睡状態のままであり，なすすべもなく翌29日に予定通りパリを離れることになった．そしてシャルル=ドゴール空港から，今回の吉田豊教授の招請者であるタルディユ教授の学生でパリ在住の中野千恵美氏へ電話を入れて，昨晩の状態が続いていることを確認した．ところが帰国直後にピノー教授から電子メールが入り，我々がパリを発ったその日に亡くなられたことを知った次第である．それからほどなく，アジア協会から会員全員に宛てられた公式の死亡通知により，以前から伺っていた通りアジア協会が法定相続人として葬儀を行なう旨を知らされたのである．従って私自身はその葬儀に臨席することも叶わず，ただ遠くより御冥福をお祈りしただけであり，痛恨の極みである．

先生は既に御高齢であり，大きなマンションで一人暮らしを続けておられたので，いざという時にはどうなるのかとひそかに心配もしていた．学問的情熱と頭脳には全く衰えが見られなかったとはいえ，この十年間には大病をされたり，階段で足を踏み外して大怪我をされ，膝の手術を受けるようなことが幾度もあったのである．今回の私のコレージュ=ド=フランス行きは公式にはオスマン=トルコ学のワインシュタイン教授よりの招請によるものであるが，実際にはハミルトン先生が仲介されたのである．先生は大学で教鞭をとられたわけではないので正式の教え子はおらず，私は数少ない実質上の弟子の一人である．今回の出来事は私にとっては非常なショックであったが，いわば先生が私を呼び

寄せてくださったのであり，最後にお目にかかることができたのも人智の及ばぬ不思議な御縁ではと，複数の方々から慰めていただいた．この追悼文を執筆できるようになったのは，そのような暖かい励ましの御陰である．

先生は 1921 年 3 月 14 日，アメリカ合衆国中部にあるカンザス州のトピカ Topeka でお生まれになり，1939～41 年カンザス大学で学んだ後，一旦はボルチモアのグレン=マーチン社に入社した．しかし日本が真珠湾攻撃によって第二次世界大戦に参戦したことにより，翌年にはアメリカ海軍に入ることを志願．ところがそこで上官に能力を見込まれ，ワシントンの海軍行政学校に回された．次いで，トルコ共和国のアメリカ大使館付き武官となってアンカラに赴任し，そこに 1945 年まで滞在した．その間にトルコ語を修得されたことが，先生の学者としての人生に大きな影響を与えたのである．1945 年 5 月に本国に戻ると，ロシア語の修得を希望していた本人の意志に反し，上官の命により日本語を学ばねばならなくなった．そしてコロラド大学及びオクラホマ大学において日本語集中教育を受け，わずか一年間で日本語を修得した後，1946 年 6 月には日本に赴任，東京の郵船ビルで日本語の秘密文書翻訳の仕事に従事した．日本滞在は 1947 年 8 月までの一年余りであり，日本人とは日本語で会話していたという．よく伺ったお話によると，日本人の親切さはいい思い出として残っているが，日本料理とくに魚や海苔・ワカメはおいしくなかったとのことである．もともとカンザス生まれで，魚といえばナマズくらいしかなく，大嫌いであったらしい．後年，日本に来られた時，バザン夫妻ともども京都は祇園のさるフランス風懐石料亭にお連れしたが，あの時の魚料理は特別においしかったと何度もおっしゃっておられた．敗戦直後の東京では，魚さえまずかったのであろうか．それとも，アメリカに移住してきた大祖母がノルウェー人で，移民船に乗った時にちょうど妊娠中であり，その時に魚の臭いに耐えられず非常に苦しんだとのことであるので，魚嫌いはその後遺症かもしれない．

日本で軍務としての通訳の仕事を終えた時点で学問の道に入ることを決意，太平洋を越えて本国経由でフランスに渡り，以後終生をパリで暮らすことにな

る．まず1947～51年，種々の苦労を重ねながらもパリ大学および東洋語学校で語学を中心に学んで日本語・中国語・トルコ語の免許を取得，1951年からはソルボンヌの高等実務学院でポール=ドミエヴィル教授に師事して1954年にパリ大学の博士号を取得，そして翌年には代父であったヴァディム=エリセーエフ博士の尽力もあってCNRSのAttaché de Recherche（助手相当）として定職に就くことができた．以後，CNRSのChargé de Recheche, Maître de Recherchеと順調に昇任し，遂にDirecteur de Recherchеとなって1989年に引退するまで，それまでとはうってかわった恵まれた学究生活を送ることになる．最初期の指導教授は中国学・チベット学で有名なポール=ドミエヴィル博士であったが，ルイ=バザン教授の要請もあって徐々に古代トルコ文献学の方にシフトしていったそうである．高等実務学院のバザン教授のトルコ文献学ゼミには，この頃から引退後まで一貫して出席し続けることになる．ドミエヴィル教授の指導のもと，パリ大学に提出した博士論文が漢籍と敦煌出土漢文文書とを歴史学的に扱った『漢文史料による五代期のウイグル』であったのに対し，ほぼ同い年のバザン教授の門下に入り，1968年に提出した第三博士号論文は『敦煌出土ウイグル文善悪二王子経』という文献学的研究であった．両者はいずれも活字になって，今に至るまで基本的な書物として利用され続けている．特に前者は1955年の初版であるが，いち早く安部健夫『西ウィグル國史の研究』（京都，彙文堂書店，1955年）に取り込まれて我が国でも有名になっただけでなく，欧米でも名声を博し，新たに増補版 *Les Ouïghours à l'époque des Cinq Dynasties d'après les documents chinois*, (Bibliothèque de l'Institut des Hautes Études Chinoises, Volume X, Paris, Collège de France) が1988年に出版されている．先生の論文・著書は決して多くはないが，どれを見てもオリジナリティに富んでおり，学問の喜びを伝えてくれる．それだけでなく，努力すればここまで「知の地平」が広がるのだというお手本を示され，困難ではあるが魅力的な研究テーマを開拓していく勇気を与えてくれるのである．私は先生のほとんどの論文が好きである．しかし，その代表作はなんといっても長年彫琢を重ねて成った『敦煌出土9～10世紀ウイグ

ル写本』*Manuscrits ouïgours du IXe-Xe siècle de Touen-houang* (2 volumes, Paris, Peeters 1986) であろう．これは 1983 年に提出された彼の国家博士論文を出版したものであるが，実はこれこそパリ留学中の私が先生の自宅で直接手ほどきを受けたテキスト群であり，多大の学問的恩恵を蒙ったものなのである．その他の著作については，一昨年に出版された先生の生誕八十年記念論文集 L. Bazin & P. Zieme (eds.), *De Dunhuang à Istanbul. Hommage à James Russell Hamilton,* (Silk Road Studies 5, Turnhout 2001) に掲載された業績目録を御覧いただきたい．

先生はお魚は駄目であったが，その他の食物については大変な健啖家であった．私も日本人としては大食らいの方であるが，毎週土曜に自宅で夕食を作っていただいた二十五年前はもちろん，去年・今年でさえ一緒に食事をしても召し上がる量は先生の方が多かった．また先生は，もしかしたら欧州最後の紳士であったかもしれない．このごろは国際学会でもラフなスタイルが目立つのに，先生はいつも帽子をかぶった正装で現れた．またアメリカ出身であるにも

かかわらず英語よりずっとフランス語を愛しておられた．外国の学者の要請で英語で話し始めても，いつのまにかフランス語に替わってしまうという場面に幾度となく遭遇したものである．

先生の蔵書は，サン=ドニ通りの広いマンションを含む財産と共にアジア協会に遺贈されることになっている．パリに永眠することになった先生は，あの整理の行き届いた蔵書や抜刷類が有効に活用されることを，心より願っておられることであろう．

先生は最後の最後まで現役の研究者であった．特にお若い時にアジア協会で図書の整理や閲覧の手伝いをして，アジア協会に所蔵されるカラバルガスン碑文拓本に接して以来，その漢文版とソグド語版の新テキスト並びに訳注の出版には並々ならぬ情熱を燃やしておられた．そして近年も吉田豊教授の師匠であるイギリスのシムズウィリアムス教授と共同でその計画を進めておられた．奇しくも私はソ連崩壊後西側からは初めてのモンゴル学術調査隊を組織し，カラバルガスン碑文についての新知見を得たため，吉田教授と共同で研究を発表することになった．ハミルトン・シムズウィリアムスと森安・吉田のいわば師弟のペアが同じ史料を互いに独立して扱う形になってしまったのである．実は今回，私と吉田教授とがコレージュ=ド=フランスに呼ばれたのは，第一に中央アジアのマニ教史について日本側の研究水準を披露するためであったが，それと同時にウイグル=マニ教史の最重要史料たるカラバルガスン碑文のアップトゥデイトなテキスト作成に向けて，予定を調整する意図が双方にあったのである．そのため我々の講義も，カラバルガスン碑文にかなりの重点を置くものになった．今となっては，本碑文の新研究は我々に課された大きな宿題となったのである．

ここにあらためてハミルトン先生の永年の御厚情に感謝すると共に，先生の御冥福を衷心よりお祈り申し上げる次第である．

2003年6月27日　　合掌